

岡崎市文化財指定調書

1 種別、名称及び員数	彫刻 木造日吉山王神坐像 7 軀 (附 台座 5 基)
2 所在の場所	岡崎市高隆寺町字峠1番地 岡崎市美術博物館(寄託)
3 所有者又は保持者の住所及び氏名	岡崎市滝町字山籠 117 番地 宗教法人 瀧山東照宮 代表役員 中川 敬弘
4 現状(品質、形状、構造、重量、大きさ、地積、範囲等)	一木造、彩色(一～四)及び素地に一部彩色(五～七)、彫眼 一 僧形神坐像(大宮):像高 22.8cm(附 台座) 二 僧形神坐像(二宮):像高 20.2cm 三 僧形神坐像(聖真子):像高 19.8cm 四 男神坐像(八王子または早尾):像高 24.0cm(附 台座) 五 女神坐像(客人または三宮):像高 22.2cm(附 台座) 六 僧形神坐像(十禅師):像高 21.0cm(附 台座) 七 男神坐像(八王子または早尾):像高 24.5cm(附 台座) 一～四の彩色は当初
5 作者、作年代の徴証又は伝説	一～四及び三の両肘以下は、正安3年(1301)～文和4年(1355)の間に成立した『瀧山寺縁起』「功德温室事」同(=三月)十二日条に僧院耀(聖蓮坊阿闍梨、1182～1253)の事蹟として「奉造立七社并早尾大行事等俗躰」と記される、山王上七社並びに早尾・大行事9軀のうち、4軀と残欠1軀の計5軀分にあたると認められる。これにより造立年代の下限は、院耀の寂年である建長5年(1253)となる。 五～七は、台座上框底面の墨書より、延宝7年(1679)に新造されたことが知られる。 (五の台座墨書銘)「奉新造山王尊像三躰／瀧山寺学頭／青竜院亮甚／法印／延宝七(己未)天十一月吉日」 一の像底に、墨書貼紙あり。「大口(宮)釈迦」

<p>6 由来及び沿革</p>	<p>日吉山王社神体として、日吉山王社本殿に伝来。各像は白木の厨子に収められ、本殿内陣背面の祭壇上に安置されていた。</p> <p>一～四は、建長5年没の聖蓮坊の僧院耀が生前に造立した山王七社及び早尾・大行事の像の一部に相当する。日吉社本宮の神像の正統な姿に基づくもので、写実的で造形的に優れ、現在知られる最古にあたる鎌倉時代前半の山王神像基準作例として貴重である。また、その9軀造立が、僧増恵による文応元年（1260）～弘長元年（1261）建造の社殿に七間社の形式が取り入れられた契機となり、日吉山王七神の信仰形態が建築様式に反映されたと推察される。</p>
<p>7 その他参考事項</p>	<p>日吉山王社は、12世紀前葉に瀧山寺の中興の祖である仏泉上人永救により近江国日吉大社（日吉社本宮）から鎮守として勧請された。勧請された山王社の社殿は、初め一間で東谷にあり、三間に改め、白山峯に移された後、文応2年（1261）に増恵法眼が七間一面檜皮葺とした。近世においては瀧山寺・瀧山東照宮と共に存続し、山王社祭礼は瀧山寺僧侶及び村人により執り行われ、神像を御輿に移し瀧山寺創建に関わる役小角が薬師如来を得たという滝壺を御旅所として渡御する、重要な祭礼とされていた。</p> <p>山岸公基「日吉山王社伝来の山王神坐像及び獅子・狛犬」『瀧山寺日吉山王社総合調査報告Ⅱ 古文書・民俗・美術工芸品 日吉山王社をとりまく歴史的環境調査報告書』（2013年）、寺島典人「瀧山寺日吉山王社神像について」『同上』、岡崎市教育委員会「日吉山王社の神像」『瀧山寺日吉山王社総合調査報告Ⅰ 建造物 日吉山王社本殿の調査報告書』（2011年）参照</p>

備考

- 1 現状を示すキャビネ型写真を添付すること。
- 2 史跡、名勝及び天然記念物については、付近見取り図を添付すること。
- 3 その他、当該文化財についての参考資料があれば添付すること。



一 僧形神坐像（大宮）



二 僧形神坐像（二宮）



三 僧形神坐像（聖真子）



四 男神坐像（八王子または早尾）



五 女神坐像（客人または三宮）



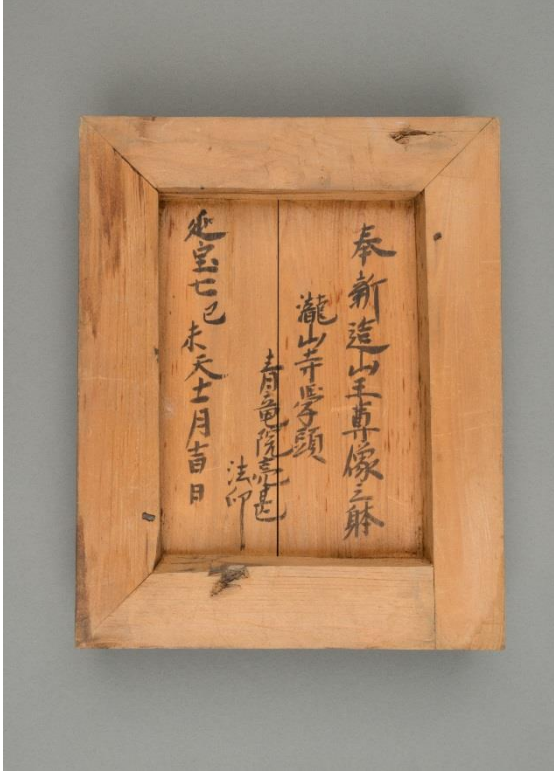
六 僧形神坐像（十禅師）



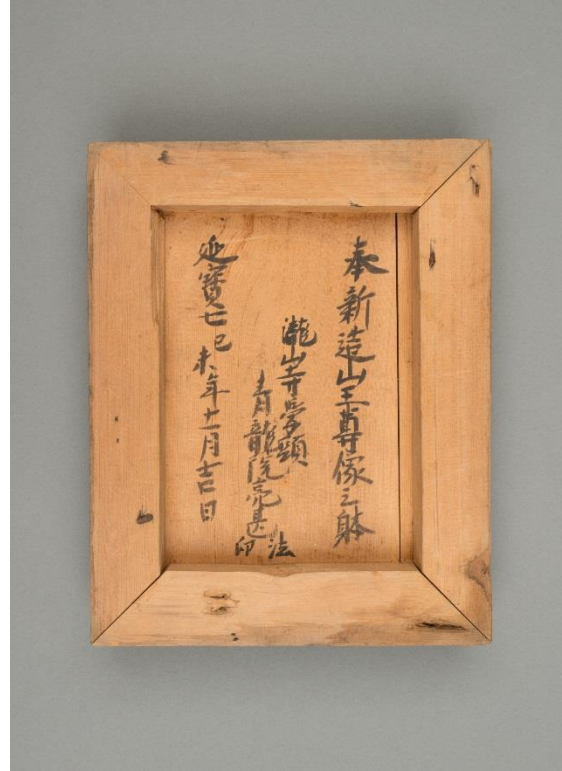
七 男神坐像（八王子または早尾）



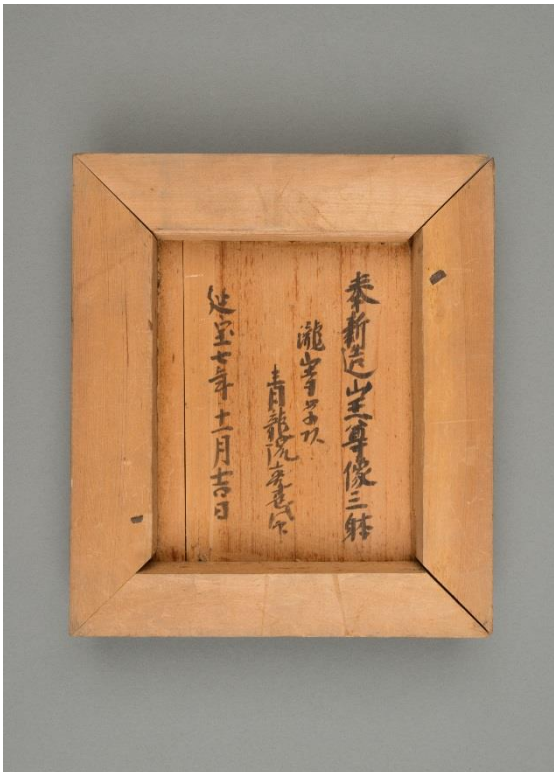
台座（上：一の台座 下：四の台座）



台座底面の墨書銘（五の台座）



台座底面の墨書銘（六の台座）



台座底面の墨書銘（七の台座）